
Destroyer

彩美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Destroyer

【Nコード】

N9087S

【作者名】

彩美

【あらすじ】

？魔？の研究所の研究者2人の不気味な実験

この作品は15禁ですが、性的表現や残虐行為が含まれています。過激な内容に当たるかもしれないので、読む方はご注意ください。

1 発情鰐

「 ワクチン入りの注射を三本。黄色の」

「 持ってきます」

「 お、お待たせしました」

「 遅い！早くしないとマーシーの治療が手遅れになるわ！」

「 すみません.....」

「ほら、行くわよ」

「はい」

此処はとある研究所。

研究と言っても、一般の研究所とはかなりかけ離れている。

フィアが私。

ミイがもう1人の研究者。

私が医師。

ミイが助手

「待たせたわね。マーシー」

マーシーは返事をしない。

マーシーはピンク色の鰐だ。今年で六歳。

鰐の六歳は、人間でいえば三十代半ばだったはず。

少なくとも、この世界では。

「・・・あらあ。お股が・・・」

ミイが鰐の股間を見つ言う。

「痙攣してるわ」

この雌鰐は異常な発情性を持っていて、私達は今からそれを一時的に押さえる薬を投与するつもりだった。

「仕方ないわね。これで我慢して」

私はミイから注射を受け取り、鰐の体内に放出させた。

「良い子ね」

途端に鰐は大人しくなり、寝息が聞こえてきた。

「呑気な鰐ね。ミイ、一旦休憩にしましょう」

「はい」　ひとくちに鰐と言っても、外の世界・・・人間の世界とでも言った方が良いのか。

人間世界の鰐とは全く違う。

姿形は同じだが、性質は異なる。

この世界は普通の世界ではない。
未知に溢れた、魔の世界なのだ。

そして、この研究所にいるのは私とミイの2人だけ。

人間、2人だけ

2 硫酸崖

3階の廊下の突き当たりには、不穏な空気が立ち込める

「101号室から、運んできて。急いでね」

「はい」

私とミイは靴を履き替える。

「慎重に。この間、滑りそうになったでしょ」

「もうあんなことは起こりません!」

「どうだか」

私はこの階が好きだ。

「ミイ、開けて」

ミイは私の指示に従い、銀色の錆び付いた重い扉を開いた。

「何であたしに開けさせるんですか」

「だって、私は担いでいるもの」

「・・・」

ミイはこの間の事がトラウマになったらしい。

「本当に気を付けてね。崖に近付くにつれて、滑りやすくなってるんだから」

「分かってますよ」

私は一步一步、注意して進む。

私の場合、更に危険だ。何てったって、70?の物体を運んでいるんだから。足を滑らせる確率も増す。

「・・・」

ドサッ！

私は70？ある物体を、思いつ切り崖下の方へ投げた。

その瞬間、後ろから小さく拍手が聞こえた。

「無事に済んで良かったです」

「・・・ありがとう」

私は物体を投げた崖下を見る。

透明な液体の一部から、湯気が上がってきていた。

「でも、時には100？を超える巨体もいるんですから。気を付け

て下さいね。それにしても」

ミイが注意深くこちらに近付いてきた。

「溶けた人間は、どうなるんでしょう」

妙な事を聞く。

「そのままよ。骨まで溶けるんじゃない？この硫酸は、人間世界とは違うから分からないけど」

「・・・もし、生きた人間が入ったらどうなるんでしょう」

ぞっとする。

苦しんでいる暇なんてあるんだろうか。

「さあ。知らないわ。・・・何だったらあんたが入って確かめてみる？」

私はミイに近付く。

ミイの身長は130?くらいで体重も軽いから、簡単に持ち上げられる。

「い、いいつ。確かめなくて良いです!!」

ミイは後退りした。

「学習しないのね。この間の事、忘れたの?」

「ひっ!」

気が付くとミイは、後一步の所で崖下に落ちるところだった。

3 乳首炉

「寒くもないのに火を焚くって、億劫ね」

私とミイは薪を集めていた。

「そうですね。これも仕事です」

ミイは無駄口を聞きたくないというばかりに、せつせと世話しなく動いていた。

私は木製のテーブルに置かれた乳首達を見る。

「男は皆、これが好きね」

「赤子もね。・・・さあ、準備が出来ましたよ。始めましょう」

ミイが黒い手袋を嵌める。
私もそれに倣う。

「汚いわね。触りたくないわ」

「女の武器ですからね。でも、やらないと給料もらえません」

「分かってるわよ」

私は暖炉に火を付けた。
と、同時にミイがその中に乳首を投げ込んだ。

「・・・」

火はそれを飲み込んで、音を立てて焼いていく。

「何か妙に安心するわね」

私は乳首を暖炉に投げ入れながら、そんなことを口にした。

「火が好きなんじゃないですか？そういう人、結構いますよ。火が好きすぎて、よその家に放火してしまう人もいますのでし」

「・・・・・・・・」

「そろそろ終わるわね」

気が付くと、テーブルの上に山ほどあった乳首も少なくなっていた。

「ねえ、ファイア」

手に持った乳首を見て、ミイが話し掛けてきた。

「何」

「・・・この乳首達って、誰のものなんですか」

「誰？ 発達具合からみて、幼女でないのは確かだね。新鮮味があるから、老女でもない。」

と、すると、10代から40代ってところかしら」

「名前とかは分かりません?」

「不明よ。この研究所にある人間の肉体は、全て名無し」

「そうですよね・・・」

ミイは下を向いてしまった。

「何か残念なことでも？まさか、個別乳首コレクションでも作るつもり」

「違います！」

ミイは怒って、握り締めていた最後の乳首を暖炉に放り投げた。

「お疲れ様。それで最後よ。
休憩を取りましようか」

ミイはそっぽを向いたまま頷いた。

赤く燃える炎の中に、汚い物は喰われていった。

4 脳害虫

215号室の冷蔵庫には、腐食した人間の脳が冷やされている。

何故腐食した脳など保管しているのかと言うと、実験に使うためだ。

「良い？ちゃんと取るのよ」

「わ、分かってます」

「・・・」

私は冷蔵庫の中から脳を取り出した。
腐食してはいるが、形は立派だ。

「外側は見当たらないわね。中にいるみたい」

私は透明な分厚い手袋をした手で、脳味噌を半分にかち割った。

・・・中から数匹の蛆虫が出て来た。

「うー・・・」

ミイが情けない声を上げる。

「私はこの脳の蛆虫を取る。ミイは別の脳を担当して頂戴」

「はい・・・」

ミイは明らかに嫌そうな顔で冷蔵庫まで近付いていった。

・・・今回はラッキーだった。

もっと酷い時は、冷蔵庫を開けた瞬間に飛び出してくるのだ。
蛆虫が。

「・・・」

私は自分の作業に集中する。

数匹とはいえ、逃がさないように全てピンセットで捕まえなくてはならないのだ。

「・・・よし、終わった」

私は10分程で一つの脳の蛆虫を取り終えた。

次の脳を掃除するために、再び冷蔵庫に向かう。

「あら？」

脳が明らかに大量に減っている。

「早いでしょ。あたしがたくさん駆除しましたから」

あんなに嫌がっていたのに。

「ちゃんとピンセットで取ったの？脳を手にとって、流しの上で振ったんじゃないでしょうね」

「まさかー！あたしは器用なんですよ。フィアと違って。そうそう、おばあちゃんの白髪取りの時だって」

「はいはい」

私は残りの蛆脳を片付けようと、冷蔵庫からそれを取り出した。

・・・今回は蛆虫が少なくて、本当に良かった。

私は虫だとか蜘蛛だとか、醜い物は嫌いなよ。

5 病原体

1階は主に入院患者の巣窟になっている。

私は医師として、時々そこに君臨する。

「こんにちは。ご気分は如何ですか」

患者に挨拶をする。

「先生。ええ、大分良いです」

Mr・ケイトは、笑顔でそう答えた。

「そうですか。では、診察します」

私が聴診器を見せると、ケイトはすぐにシャツを捲り腹を見せた。

「・・・大分、落ち着いています。この分だと、もうすぐ退院出来ますよ」

「本当ですか？嬉しいなあ」

ケイトは捲っていたシャツを下ろしながら、窓の外を見る。

「良かったですね。胃の方はもう再発することはありませんし、退院したら色々なものが食べられますよ」

彼は胃の病気で、一年程前から入院している。

感染力のある病原菌だったため、手術するまではこの研究所の隔離室に入っていた。

「・・・そうですね」

ケイトは、窓から目を逸らさなかった。
・・・何か思い出しているのだろうか。

「入院食も、豪華になっていきますよ。
・・・では、私は失
礼しますね。ゆっくり休んでください」

ケイトは返事を返さなかった。

私は65号室を出た。

ふと、さっきの光景を思い出す。

「窓の外・・・」

何か、希望を見つけたのだろうか。

6 白濁蛾

「面倒くさーい。こんな仕事、やりたくない」

声を荒げているのは、最新型01号の少女ロボットだ。
少女と言っても、見た目も中身も5歳くらいだが。

「つべこべ言わずに働きなさい。それに、暇だから手伝いたいって
言っただの、あんたじゃない」

「こんな細かい作業だと思わなかったんだもーん」

「そのロボットに部品を取り付けて。早く、ミーラ」

「ふえーん。その“ミーラ”って名前が気に入らないー。“ミイラ”
みたいじゃない。地下に眠る、あの」

「あいにく、その名前を付けたのは私じゃないのよね。 “ミイラ” さん」

「ファイアのバーカー！」

ミイラは半泣き状態でロボットに近付き、作業を始めた。

「ロボットに涙をかけないで頂戴よ。壊れるから」

「分かってるよ！ミイラ自身がロボットだもん」

・・・よく分かってるじゃない。

私も、作業を再開した。

ロボットって、案外厄介なものだ。

ロボットには体中に穴が空いていて、部品を穴に差し込めば、簡単に動くと思っていた。

・・・でも、微妙に違った。

部品を差し込めば動くのは当たっているのだけど、その部品を入れるまでが大変なのだ。

穴を見つけても、腕やら足やら、しまいには土台となる螺旋まで、入っていつてくれなかったりする。

だから私は、研究所の中でもこの作業はあまり好きじゃない。

はあ、と溜息を吐こうとした時、不意にミーラの姿が目映った。

「ミーラ・・・」

私はその姿を見て、呆れてしまった。

「仕事中よ。やめなさい」

「やだあ。これ、面白いのに」

何とミーラは、人間性雄ロボットの性器を弄って遊んでいた。

「フィアも見て。どんどん硬くなってるよ」

・・・呆れて言葉も出ない。

この子は、いつからこんな性格になってしまったんだろう。

「ミーラ、知ってるよ。おちんちんって言うんでしょ！これ」

ミーラは、世話しなく指を動かし続ける。

「やだぁ！ピクピク動いてる。生き物みたい」

ミーラはそれを、引っ張ったり縮めたり。

まるで、拷問だ。

「ミーラ。自分がされて嫌なこと、人にするんじゃない」

私はミーラを連れ戻そうと、肩を思い切り掴んだ。

が、それは呆気なく振り解かれてしまった。

「痛っ」

振り解く力の強さは、私に軽い悲鳴を上げさせる程のものだった。

ペチャ、ペチャ・・・

しまいには、ミールは肉をしゃぶりだした。
部屋に下品な音が響く。

「・・・・・・・・・・はあ」

今度は本当に溜息が出た。

「ん、ん。んっ！」

ミーラの舌に踊らされている雄ロボットが可哀想だ。
何だか、見ているこっちまで気分が悪くなってきた。

「……んんーっ！」

突然ミーラが悲鳴を上げた。

こちらを向いた顔には、白い液体がこびり付いていた。

「何か出したあーっ！ミーラの顔に出したーっ」

辺りには魚介類を思わせる臭いが舞っていた。

「自業自得」

「……もう！お前のせいだーっ！」

ミーラは自分の右足を高く掲げ、それを雄ロボットの胴体目掛けて振り下ろした。

ガシャンッ！

玩具を思わせる音が鳴り響いた。

「顔洗ってくる！」

ミーラはすぐそばにある洗面台へと向かって行った。

私もすぐそばにあった鉄パイプを持ってミーラについて行った。

ガンッ！！

「いだっ！何よファイア！鉄パイプで殴ることないじゃない」

「あの子の敵」

「ううーっ・・・」

本当はもっと殴ってやりたかったが、壊れられても困るので、一発にしてみた。

「良かった。壊れてない」

私は雄ロボットに身体異常がないか確かめた。

結果は異常無し。

「さっきは痛かったですよ。・・・ごめんね？」

私は人間性雄ロボットの頭を優しく撫でた。

7 解体部

「そろそろ始めますが・・・怖くはないんですか？」

ここは顔面手術室。

今日私は、整形手術の予定が入っていた。

「怖くなんてありません。やっとこの顔から解放されるんですよ？
嬉しいに決まっています」

患者のミュー-tonは、不適な笑みを浮かべた。

「・・・眠くなってきたわ」

「でしょうね。顔面麻酔を施しましたから。・・・ゆっくりお休み下さい」

やがてミュートンは、深い眠りに落ちていった。・・・永遠の眠りのように。

「ミイ、メスを取って頂戴」

「はい」

彼女、ミュートンは、今年で30歳になる女性だ。

会社にいた頃はバリバリのキャリアウーマンだったらしい。

本人曰く、周りからの信頼も厚く、上司にまで頼られていたそうだ。

「この顔でも、良いと思うんだけどねえ」

私はミュートンの鼻の骨を砕きつつ、そう呟く。

「他人は良くて、自分が良くないこともありますよ」

眼球を抉り出しながら、ミイも呟いた。

こういった手術は慣れているが、何だか、勿体無い気がする。

だって、こんなに整っているのに。

新たな骨を補強したり、新鮮な眼球を取り付けたりとしているうちに、いよいよ終盤だ。

すると、ミュートンは歓喜の声を上げた。

「・・・理想通り！私、生まれ変わったんだわ・・・」

ミュートンは私を熱烈の眼差しで見る。

「ありがとう、先生・・・」

銀の鏡の前には、口が裂け、鼻は斜めに曲がり、目が異常に飛び出した人間が笑っていた。

8 恥辱淫

「痛いっ。やめてよぉ！」

「暴れちゃ駄目です。これはフィアからの命令ですから」

今日は最新型01号の精神処刑日。

「フィアはどこに行ったのよ！」

「出張です。だから、代わりにあたしが精神処刑を担当します」

フィアは運悪く今日は出張だった。

精神処刑を受け持つのは初めてではないが、種類は初めてかもしれない。

「ミイのバーカ！ミーラ、何にも悪いことしてないのに！」

無邪気なロボットは可哀いな。

「人間性雄ロボットをからかって遊んだでしょう？今日はその処罰」

「ちょっとだけだもん……。それにあのロボット、白い液出して喜んでたよ。ミーラにその液かけたし……。処罰するなら、あのロボットにしてよ！」

コイツは本当に馬鹿だ。

「先に手を出した方が負け。それに、その体じゃ、動けないでしょ」

既に、暴れるミーラを無理矢理ベルト器に押さえつけてある。

どんなに卑怯な真似をしようとも、もう逃れられないのだ。

「うー……」

「口を自由にしてもらっただけでも感謝してよ。じゃあ、始めますよ」

あたしは一番端にある赤いボタンを押す。
ミーラの股が全開になった。

「どれにしよう・・・悩めますね」

ミーラの大きい目は、赤くなっていた。
泣くのを我慢しているのだろうか。

あたしは悩んだ末、左側にある黄色のボタンに手を掛けた。

「ん・・・」

上から吊ってあった小さな機械から、指が飛び出す。
そして、ミーラの股間に入ってしまった。

「ミーラ、おちんちんが良い。あれの方が気持ちいい」

そう言うミーラの腰は浮きそうになっていた。
あたしは、ミーラを無視する。

「もう少ししたらね」

あたしはぼそりと呟くと、青いボタンを押した。

再び指が下りてきて、今度はミーラの服を剥がし始める。

そして、ミーラの胸を揉みだす。

「あー。おちんちん・・・」

「そんなに良くない？そりゃ、胸って言えないもんね。その胸」

実質、ミーラは5歳なのだ。

・・・暫くすると、ミーラは愚図りだした。

「チンポー！ミーラ、チンポが良い！！」

段々下品になってきた。

「分かったわよ」

あたしは見ていられなくなって、一番下にある黒いボタンを押した。

「！」

ミーラの腰が振動し始める。

あの物体は、作り物の男性器だ。

「あーん・・・ミーラ、イキそう」

作り物にあんなに翻弄されるなんて・・・。
やっぱり馬鹿だ。

「ねっ、早くあの液だして・・・何て言っただけ。・・・そう、精子！」

ミーラの腰は振り子のようになっていた。
・・・もう止めるべきかな。

「あ、あれ？」

あたしは金色の一際大きいボタンを押して、全ての機能を止めさせた。

「ミイツ！まだ精子出してないのに」

「もう撮る必要がないと思ったから、機械を止めたの」

あたしは小型カメラのスイッチを切る。
念の為、再生してみた。

『チンポー！ミーラ、チンポが良い！！』

「うっっ・・・」

ミーラの涙は、頬を伝って床に落ちた。

「ミイの卑怯者!!」

「・・・どっちが卑怯かしら。雄ロボットを騙した貴女と、真っ正面から向かったあたしと。まあ、良いわ。お疲れ様」

「・・・」

「このビデオは、この研究所内の全ての電気回線に繋がっている。・・・つまり今撮った映像は、生放送で、研究所内の全てのテレビで放映された」

「っ・・・ミイの」

「！」

「バカアーーーー！！！！！！！！」

「……っ」と

あと少しの所で、ミーラの右足を受け止めた。

「うっっ」

「危ない。あと少しであたしの左肩が外れるところだった」

「……」

「ミーラ。あなたはすぐ暴力に走る傾向があるみたいね。……もつと、教育をしなくちゃ」

「教育・・・」

ミーラは俯いて、身震いをした。

「じゃあ、精神処刑は終わったから。もう出て行って」

「え？ あっ！」

あたしは両手でミーラを部屋から追い返すと、室内の掃除を始めた。

9 卵巣乱

「また火を焚かなくちゃならないのね」

「寒くもないのに」

「その通りよ」

私とミイはまた、暖炉の前にいた。

「・・・さ、薪は用意出来た。ミイ、火をつけて頂戴」

「はい」

ミイはマッチに灯る火を、暖炉へと投げつけた。途端に、暖炉に赤が広がる。

「さっさと焼いちゃいましょう。量も少ないし」

「そうですね」

私とミイはテーブルに置いてある物を掴む。

「ミイ、知ってる？」

「はい？」

「ここに置いてある卵巣のこと。持ち主」

「知らないですけど・・・」

私は手に持っているそれを暖炉に投げた。

「教えてあげる。利益のあることでもないけど」

「・・・」

ミイも卵巣を投げ入れた。

「前も言っただけど、ここにある人間の体の一部の持ち主は、不明よ。……だけど、取り出すとき。どうやってやったと思う？」

「さあ……普通に麻酔をかけたんじゃないですか？臓器移植みたいなもんですし」

ミイは首を傾げる。

「ところがね、違うのよ。何代か前の博士は、この卵巣を、麻酔なしで取り出したみたい」

「え？」

「つまり、麻酔をかけないで直接腹を切り、血に塗れた卵巣を取り出した。女は、相当の激痛だったんじゃない？」

相当の激痛。

「じゃあこの卵巣って……何年くらい前のものなんです？」

「さあ？状態から言って、多分、百年くらい前の卵巣じゃない。当事者も、とつくに死んでる」

喋っている間も、私の手が止まることはない。

「で、何故当時の博士が卵巣を何個も集めたかと言つと・・・」

「言つと？」

私は少し間を開けた。

炎が段々強くなつてきているようだ。

「・・・ストレス発散」

「ストレス！？」

今私とミイが手にしている物で最後だ。

「当時の博士、男性だったらしいけど・・・。卵巣を集めるのが趣味だったみたい。」

でも博士、女が死ぬほど嫌いだね。
日頃のストレス発散のために女から卵巣を取り出して、活用して
いたんだって」

「・・・・・・・・」

「その発散方って言うのが・・・・ちょっと面白くてね。血塗れの卵
巣を壁に投げつけて、そこから滴った液を舐めるの」

「舐める？女が嫌いなのに？」

「嫌いなものほど執着するって言うでしょ。きっと彼は、そういう
タイプだったのよ」

「ああ・・・」

「そして今私達が焼き終えたこれらが、彼の遺してくれた最後のス
トレス発散物だったってわけ」

「何か・・・複雑、ですね」

「面白い話だったでしょ？」

「うーん・・・」

やがて炎は青に変わった。

10 歯要技

所内の2階には歯科技術科がある。

・・・即ち、歯医者だ。

「こんにちは。右下の歯は大丈夫でしたか」

「はい。痛みはありませんでした」

「・・・そうですか。良かったです。では前回お話した通り、神経を抜きますね。再発は困りますしね」

「・・・はい。よろしくお願いします」

患者は口を開ける。

大抵の人間は歯医者嫌いのはずだが、彼は違った。

「歯医者、何回目でしたっけ」

「忘れました。でも、もう3ヶ月も通っていますから、すっかり慣れましたよ」

私は右下の歯茎に、麻酔を注射する。

「三分ほど、お待ち下さい」

私はそう言っただけで席を立つ。
彼は笑顔だった。

「ミイ、受付はもういいわ。予約の人は全員来られたでしょ」

「はい」

「別の患者を当たって。重症な患者は私の所だけだから」

「分かりました」

「お待たせしました、ジョンさん。早速、治療に取り掛かりますね」

「はい」

右手にドリル、左手に吸収器を持ち、作業をしていく。

・・・ドリルの音が耳障りだ。

しゅるしゅると回転音を立てて、歯の黒い部分を削っていく。

「大丈夫ですか？」

「はい」

私は途中、ドリルを口から外して患者に問い掛ける。

痛くても我慢をする患者もいるので、気を付けなくてはならない。

・・・最も、麻酔をかけているから、痛いということはないはずだ

が。

「頑張つて下さい。もう少しですよ」

もう削る部分はない。

あとは、神経を引っこ抜くだけ

「・・・抜けました。あとは、薬を詰めるだけです」

患者は表情を変えない。普通なら、ほっとしたような、脱力感に見舞われたような、そんな顔をするもんじゃないだろうか。

私は薬を詰め、歯周りを消毒した。

「今日はこれで終わりです。次回は、銀歯の型をとりますね。お疲れ様でした！」

「・・・ありがとうございました」

患者のジヨンは、そう一言だけ言うと、受付へ向かっていった。

「ミイ、会計お願い」

「ジヨンさんね。分かりました」

ミイはぱたぱたと受付の方へと走って行った。

ふと受付を見遣ると、ジヨンの後ろに小さな女の子が立っていた。

11 堪能機

今日も私は仕事を始める。
厄介な仕事を。

「こら、離れなさい。醜いわよ」

相も変わらずロボット達は腰を振り続ける。

「・・・・・・・・」

雄ロボットに乳首を舐め回されている雌ロボット。
雄ロボットの性器をくわえる雌ロボット。

ビチャ、ビチャ・・・

雌ロボットの性器を舐め回す雄ロボット。

「あんたたち、こんなことばかり続けて良いと思っているの」

どのロボットもこちらを見ない。

「あんたたちは、働くために生きているのよ？人間のようにな、性器を満足させるためだけに生きているんじゃない」

皆、液を出そうと必死になっている。

「・・・・・・・・」

ビチャ、ビチャ・・・

「聞いてるのっ!!」

私は近くにあった火掻き棒で、絡み合うロボット二体の頭を殴った。

・・・その瞬間、部屋は静まり返った。

「あんたたちは何しにここにいるの？性器を濡らすため？ 違うでしょ！あんたたちは、研究のためだけに生かされてるの」

ロボット達は動かない。

「あんたたちロボットは、人間に不可能なことが楽々とこなせるの。・・・もちろん思考や表現には乏しいけれど、人間科学を超える能力を持っている」

ロボット達は、それぞれの性器を仕舞い始めた。だが、床やテーブルに飛び散った汁は自動的に戻ってはくれない。

「なのに、何故その能力を自ら殺してしまう？
かつて自分達を奴隷のように扱った人間を、見返してやりたいとは思わないの？」

いつの間にか、雄ロボットも雌ロボットも整列していた。
・・・どうやら、私の話を分かってくれたらしい。

「分かってくれたのね。皆が正気に戻ってくれて、良かった。
・・・さあ、理解したのなら、今すぐ自分達のお部屋に帰りなさい。
此処は特別に、私が掃除しておくわ」

ロボット達は互いに目を合わせると、白くなった部屋を出て行った。

「
今度暴れたら、壊すから」

12 変遷俱

私は5階の変換室にいた。

慎重に器具を血管に取り付ける。

その紐と紐を、固く結び付ける。

「怖くはないの?」

私はまだ目の開いている孫の方に話し掛けた。

「何で?僕は嬉しいよ?今まで辛い思いをしてきたおじいちゃんに、新たな人生を贈ることが出来て」

少年は穢れのない笑みでそう答える。

「貴方はまだ5つでしょう？自分の人生が惜しくはない？」

「全然。僕、これでも結構充実した日々を送ってきたんだ。悔いなんてないよ。」

もし、僕がここでおじいちゃんに体を与えられなかった方が、それこそ一生の後悔だよ」

「・・・貴方は強いね」

私のその言葉が合図だったかのように、少年の瞼はゆっくりと落ちていった。

・・・そろそろ始めるか。

私は寝台の下に付いたボタンを押す。

すると、辺りに微かに電気の音が走った。

・・・あとは時が経つのを待つだけ。

この作業は複雑そうに見えて、実は一番楽な作業だったりする。

何てったって、ボタン1つ押せば完了だもの。

難しいのは、心理的な回復か・・・・・・・・

数時間か経ち、祖父と孫は目を覚ました。
“違う”目を。

「鏡をどうぞ。・・・お孫さんの姿になっているでしょう。声も」

「ええ・・・感謝します、先生」

孫の姿に変わった祖父は、孫の声で喋る。

「先生、ありがとう。僕、嬉しいよ」

祖父の姿になった孫は、囁れた声で喜びを伝える。

「大したことはしていません。私は、これが仕事ですから」

「わし、また元気な体になったんじゃ。これからは、病気を気にする必要もないのう」

「良かったね、おじいちゃん。僕の方まで、長生きして」

「分かっとなる分かっとなる。せつかくケビンにもらった体なんじゃ。長生きしなくては罰が当たる」

「頑張つて。僕、天国でおじいちゃんのこと見てるから」

祖父と孫は、いつまでも微笑みあっていた。

13 声帯欲

「お掛けになって下さい。すぐに終わりますから」

私は患者を椅子に座らせる。

「それにしても、本当に良いんですか。勿体無いとは思いませんか？」

「いいえ。寧ろその逆です。要らないですから、こんなもの」

患者は喉を突いた。

そして、皮を軽く摘む。

「私はね、声優をしてたんです。だけれどある時、あなたは才能がないと言われ・・・やめました」

「・・・」

「声優界って、案外厳しいものでね。外の世界へと出る方は、ほんの一握りなんですよ。数え切れないほどいる声優の中で、人気を誇れるのは一部だけなんです」

患者は、途中で声色を変えた。

「ネリウスさんは、お上手ですよ。今の話し方を聞いただけで、分かります」

本当に上手かった。

普段の高い声から、怖い感じの低い声に変わる様は、プロだと実感させられる。

「そうですね！ネリウスさん、声キレイなのに・・・」

ミイも横から肯定する。

「ありがとう2人共。でも、私決めたのよ。・・・眠くなってきた。

もう時間ね？」

「・・・はい。お休み下さい」

患者は大きな目を閉じていった。

「始めるわよ。多分、10分程で終わるわ」

「・・・はい」

私はその綺麗な喉元に、高圧性の電気を突き付けた

「　　こんばんは、ネリウスさん」

「・・・・・・・・」

患者は暗い窓を見る。

私はそんな患者に、紙とペンを渡した。

『ありがとうございます、先生』

その言葉は、文字によって返された。

「いえ。それより・・・これからの生活は不便でしょう。何しろ、声を失くしてしまったのだから」

『全然平気です。これが、私の望みだったんですから』

字は乱れていなかった。寧ろ、丁寧に書かれすぎていて怖いくらい。

「・・・ネリウスさん、お元気で」

ミイのその言葉に、患者は頷くだけだった。

14 精繁殖

「もう疲れました。休憩にしませんか？」

ミイが聞いてくる。

「駄目。あとどれ位残ってると思ってるの」

私は床やテーブルに散らばる白い粘着物を睨んだ。

「たくさんです、はい。・・・全く、これだから雄は嫌いなんです
よお」

「仕方ないわ。出さないと正気を保てないんだから」

「そうですねー」

私はテーブルを雑巾で拭いた。

「とは言え、性欲の強さは女も同じよ」

「まあね。男のアレに反応して濡れるんだから」

「汚い話」

「ミーラ、どうなっちゃうんでしょう。ロボットとは言え、5歳なのに……。あんなにアレが好きになって」

「悪いけど、“性欲”って言うのは誰でも持つものよ。早くて3歳から。そういう言葉に敏感になったり、性器に関する用語を発するようになる」

「ミーラが良い例」

「その通り」

私は液体のこびり付いた雑巾を捨てた。
・・・あとは床だけか。

「人体って不思議ですよ。何で男のアレは大きくなるんでしょう」

「下品ね。神が決めた、そういう仕組みなの」

「いやー、人間じゃないですよ。男が腰振って、出すですよ。きつとその時、人間の形相してませんよ」

ミイは冗談のように笑う。

そして、床を拭く手の早さを上げる。

「・・・まあ、あたしたちもそうやって生まれてきたんですけどね」

「そうね。男が女の中で頑張ったから、私達が生まれたのね」

「そう考えると、この白い液はかつての私達だったんですよ・・・」

「

ミイは遺伝液を見つめる。

「人間なら、誰もがそうよ。でも、それはロボットの液よ」

「・・・ですね」

「床の汚れを片付けちゃいましょう。これから診察も入ってるし」

「はい」

一瞬、床に散らされたロボットの分身が、動いたような気がした。

15 電通路

「フィア、早く早くっ！おばあちゃんが待ってます」

「分かってるわよ。それに、おばあちゃんじゃなくてアンネ博士でしょ」

「分かってますって！」

おばあちゃん アンネ博士は、15年ぶりに此処へ来た。

15年前に爆破事故で博士を辞めて以来、自宅で火力の研究を続けていたらしい。

博士は今年で還暦を迎える。

「おばあちゃん！お茶とお菓子持ってきました」

「ありがとう、ミイ・・・」

博士・・・おばあちゃんは、あたしを見て微笑む。

「おばあちゃん、こんな所で窮屈じゃないです？此処、出入り禁止です。殆ど機能してませんよ。・・・ああでも、その椅子は心地良さそうですね」

あたしはおばあちゃんの腰掛ける電気椅子を見る。
椅子の周りは、細い磁石が輪を作っていた。

「・・・そうね」

「あ！布巾忘れた！すみませんおばあちゃん、取ってきますね」

「どうぞ」

「・・・おばあちゃん、あの部屋に通して良かったのかしら」

あたしはピンク色の布巾を手取る。

「博士があ部屋が良いって言ったんだから、大丈夫よ。それにあそこ、元々は博士の研究室なんだし」

「そうなんですか!？」

「ええ。爆発したのは違う場所だけだね」

「おばあちゃん、火力って、どんなことを研究してたんですか」

「火に対する化学反応。燃えやすい草とか、電気に繋がる火力回路・
・」

おばあちゃんは床へと落ちる磁石を触った。
磁石は、その手からするりと滑る。

「大変だったわ。この15年間」

「おばあちゃん・・・」

悲しそうに目を細める姿に、あたしは苦しくなった。

「おばあちゃん、気にしないで良いんだよ？15年前のあれは
事故だったんだから。おばあちゃんは悪くない」

「・・・」

「それに、おばあちゃんだって、腕に大怪我をしたじゃない」

あたしはおばあちゃんの腕に捲かれた白い包帯を見る。

・・・あの時は、本当に酷かった。
ガラスが腕中に突き刺さって・・・血塗れで。

「・・・ありがとう、ミイ。・・・お茶がなくなっただわ。御代りも
らえるかしら？」

おばあちゃんは微笑を含んで言う。

「・・・分かりました」

あたしはそう言い残して、部屋を出た。

「　　よこしよ」

台所にフィアはいなかった。
診察に向かったのだろうか。

・・・それにしても、おばあちゃん、大丈夫かな。
事故に遭った日から、精神が不安定のようなのだ。

「・・・あたしが、しっかりしなきゃ！」自分の頬を両手で叩いた。

あたしには、もっと色んなことが出来る！！

「 おばあちゃん、お待たせ 」

おばあちゃんは、磁石を握り締め、俯いていた。

「？」

あたしはおばあちゃんに近付いた。
肩を揺すってみる。

「おばあちゃん？」

おばあちゃんは返事をしてくれない。
心なしか、磁石の先端がぱちつと音を立てた。

「・・・・・・・・」

足元には使用済みのマツチが何本か散らばっている。
何となく焦臭い。

「おばーちゃん、動かなくなっちゃったよ・・・」

16 蘇生殊

安眠室から屍体を取り出す。

それは、実に奇麗だった。

「さあ、始めるわよ」

私は機械の調整をする。

「・・・分かってると思うけど、呉々も失敗しないように。今回の
は、失敗したら取り返しがつかないんだから」

「はい」

私は寝台に横たわる獣を見遣る。

「それじゃあ、スイッチを押して」

ミイに指示を出す。

ミイは、黄色のボタンを押した。
電気ショックだ。

「・・・大丈夫そうね。臓器の改良を行いましょう」

「はい」

いつになく緊張感が室内を包む。

微かな腐敗臭が立ち昇った。

肉を切り裂き、心臓の形を整える。

頭蓋骨を固める。

・・・内部は、案外整っていた。

そんなに手間も掛からないだろう。

「この子、美しい緑の目をしている」

横たわったモノを見る。

「本当。ねえフィア、この子、視力は失っていないし、目はこのままで良いわよね？」

「・・・そうね。そうするべきだわ」

再び作業を開始する。

「ミイ、臓器の方は終わったわ。あとは、また電気ショックを与えるだけね」

私は寝台下にある黄色いボタンを見た。

「・・・押しますよ?」

「了解」

ミイは勇気を振り絞るようにして、黄色に指で触れた。

ビリビリ・・・

パチパチパチ・・・

電気の流れる音が小さく木霊した。

しばらくの音の後、電気は止まった。

「・・・生き返るかしら」

それは、動きそうにない。

「どうでしょう」

ミイは思案顔になる。

血塗れの両手は、後ろで組んでいた。

「・・・ん？」

微かだけれど、それは動いた。

「ミイ、今」

「動きましたね」

更に、動いた。

蘇生は成功　　か？

ワン！

大きな緑をぎよろぎよろとさせたそれは、大きく一声、鳴いた。

17 破壊餐

「最近は、皆大人しくなった」

4階の資料室。

私は、ミイと二人で所内のロボットの資料を読みあさっていた。

「そうですねえ。まあ、全てのロボットを確かめたわけじゃないですけど」

その通り。

奴らは、私達の見ていない時に何かやらかしているかもしれないのだ。

「さてと。そろそろあいつらの所に行きましょうか」

ミイは黄ばんだ資料を棚に戻し、私を促した。

『機械人間室』

ロボットのいる所だ。

「何事もなきゃ良いわね」

「そうですね。死人が出ないことを祈ります」

と言っても、餌をやりに来ただけなのだが。

キィ

重厚でもない鉄の扉を開く。

中は、静かだった。

「皆、元気だった？」

私はロボット達全員にそう呼び掛ける。

誰も返事らしい仕草はしないが、表情は穏やかだった。

「ご飯を持ってきましたよー」

ミイが笑顔でロボット達にそれを配っていく。

人間で言うなら、ある程度の質の昼食。

ロボット達は慌てたようにそれに噛み付く。

私にはその意地汚い姿が可愛らしく見えて、思わず微笑んでしまった。

「~~~~~!」

不意に、何処からか甲高い声が聞こえた。

「・・・フィア。この声、まさか・・・」

鎖の奥へと進んでみる。
・・・案の定。

「ミーラ・・・」

「んんっ」

ミーラがいた。

昼食中のロボットの肉棒を下品にくわえていた。

「あんたね！ついこの間、精神処刑があつたばかりでしょ！？」

「だから何？ミーラ、おちんちん大好き・・・」

怒鳴りつけるミイに対し、ミーラは虚ろな目を向けた。

「性欲は抑えられないと言うことね。でもね、ミーラ。命ある者皆、それを抑えて生きているのよ。もちろん、ロボットも」

ミーラの口から唾液が滴った。

「貴女もそうしなければならぬ。生き方を倣うべきよ」

私はミールを雄ロボットから離れさせようとした。

が、その手は空しく振り払われてしまった。

「・・・ファイア。任せて」

その様を見たミイが、口を吊り上げて言った。

・・・大丈夫だろうか？

「ミール、良いものあるよ?」

そう言ったミイの手にぶら下がっているものは・・・

「あー、おちんちん！おつきい！　ねえ、勃ってる？　勃起してる！？」

ミーラが雄ロボットの肉棒から離れ、模型の方へと近付いて行った。

その隙に私は、雄ロボットを別の場所へ移動させた。

「もう大丈夫」

「本当だ、硬い！精子詰まってるよ」

不意に、ミーラがそれに手を伸ばす。

透かさずミイがそれを高く天井に上げる。

「何すんのよお！」

「あげるなんて言っていない。それにこれは、模型よ。あなたの求める精子は詰まってないわ」

ミイはミーラから遠ざかっていく。

ミーラは唇を固く噛み締めていた。

「・・・」

ガシャンッ!!

「!？」

不吉な音が聞こえた。

此処に物は置いていない。

まさか・・・

「ミィラー!!」

案の定。

「ミィラ悪くないよ。ミィが悪いんだもん。ロボット取り上げるから・・・」

ミィラの目の前には、雄ロボットの胴体と頭が分かれた状態で散らばっていた。

「良いじゃん！フィアだって、たくさんの命奪ってきてるじゃない」

ミィラの手には鉄の棒が握られていた。

ロボット達の住牢から力任せに鉄を抜き取ったのだろう。

気が付くと、私の手にも鉄棒。
錆び付いていた。

「ミーラ・・・」

バキィ！！！！

次の瞬間、空を切る音と共に、惨い音が聞こえた。

側には髪を二つに結った少女が、バラバラに碎けて転がっていた。

血の一滴も出ない。

「ファイア・・・」

ミイが近寄ってきた。

「仕方のないことよ。この子は、大切な命を奪ってしまった」

下は見ない。

これは、私の宿命でもある。

「私達は“破壊者”だから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9087s/>

D e s t r o y e r

2011年5月25日22時25分発行